

敵を打つ いや敵の像を打つ

平瀬礼太

腹癒せという言葉がある。怒りの矛先を変えて、気を晴らすということである。腹立たしいことが起きて、声高に言い返したいところで、そんなことが出来ない場合が今の世の中にも非常に多い。別れ話を切り出された恋人の写真を切り棄てたとて状況は変わるわけではないが、なんとはなしに気が晴れる、少なくともこころでもしなければ収まらぬ、ということもあるだろう。

現代社会において、例えば圧政が続く状況下に為政者の写真を切り裂いたり、焼き払うことでフラストレーションを解消し、反逆のメッセージを掲げるようなニュース映像はそれほど珍しいものではない。当該の本人に直接の影響を与えられないまでも、本人の像（イメージ）を傷つけることで、間接的影響を与えること（評判を落とす、威嚇するなど）は可能であり、そのような行為に参加した人々

は、幾分かはスッキリした気分を味わうことができる。たとえ攻撃の対象者本人ではなくとも、その身代わりとしての像に危害を加えることは、人々の精神的側面において十分機能するのである。

このように怒りや敵愾心の的として像を傷めつける例は、近年ではサダム・フセインや、バッシュヤール・アサドなどに対するものが有名である。もちろんこれは敵対側からの話であり、支持者側にとってみれば、一転して彼らの像は崇敬の対象として恭しく掲げられる。像の対象となるのは、たいていある価値観において人並み優れたレベルを体現している人物であるが、基準となる価値観にズレが生じれば、崇敬の対象とまではならず、全く異なる価値観を基準とするならば、時に敵対の標的と変じて攻撃が加えられることとなってしまう。現代の日本において、ここまで

極端に嫌悪の感情を像にぶつけられるような人物は見出しにくく、それはそれで幸せなことであろう。幕末〜近代のいくつかの先例を見てみることにしよう。

1 足利三将軍木像梟首始末

時は幕末の文久3（1863）年のこと。前年には薩摩藩士がイギリス人を殺傷する生麦事件が世間を騒がせ、尊王攘夷運動が最も盛んになっていた頃である。このような空気の中で、建武の新政で朝廷に政治を取り戻した後醍醐天皇を吉野へと追いやった足利尊氏は、朝敵として国賊の誹りを受ける。そうはいっても500年以上も前に亡くなった人物であり、いまさら彼を非難したところでと思うのは短絡的なのであろう。2月22日の夜、尊皇派の志士たちが足利尊氏の墓所としても知られる京都・等持院に安置されていた室町幕府の初代將軍尊氏及び2代將軍義詮、3代將軍義満の木像の首を持ち出し、京都の三条河原に晒し首としたのである。

この、以前は有名であった事件を取り上げた書籍は多いが、ここでは佐藤浩敏『慶応戊辰奥羽蝦夷戦乱史』（1917）を参照する。それによると、木像の首の傍らにはこ

のような罪状書きが添えられていた。「逆賊 足利尊氏 同義詮 同 義満 名文を正すの今日に当り、鎌倉以来の逆臣、一々吟味を遂げ、誅戮すべきの所、此三賊巨魁たるに依て、先づ醜像へ天誅を加ふる者也」。

このように始まった後に、皇国の大道は神代以来の風習であるにも関わらず、源頼朝が朝廷を悩まし、北条、足利に至って罪悪は憤激に耐えない、500年前であったなら生首を引き抜くべきところとまで記す。そして「先づ其巨魁の大罪を罰し、大義名分を明かさむか為め、昨夜、等持院に在る処の尊氏始め、其子孫の奴原の醜像を取出し、首を刎ね、是を梟首し、聊か旧来の蓄憤を散するもの也」と事の経緯を詳らかにする。

この罪状の作者は、織田信長がこれら逆賊を断滅して愉快であったが、それ以来も足利の右に出る奸賊が多く出ているとして、暗に足利を徳川になぞらえて痛烈に批判していることは明白である。この梟首見たさに三條大橋付近は人山を築いたという。

浪人が起したこの幕府をないがしろとする事件に激怒した京都守護職の松平容保は、犯人を探し出すことを決意、或る者は斬られ、或る者は捕らえられている。

因みに足利尊氏の評価は明治以降幾度かの変転を見せている。1903年の国定教科書「小学日本歴史」では南北朝並立の立場をとり、尊氏についても才智に富んでいたという評価を行っていた。山路愛山は「時代代表日本英雄伝」というシリーズで原著としてあえて『足利尊氏』（1909 玄黄社）をとりあげ、奥村恒次郎は『明智光秀』（1910）で「大器量の男で、確かに頼朝以来の名将であつた」と好評価を下している。

しかし1911年に南北朝正閏論争が起こつて国定教科書の両朝並立記述が問題視され、時の桂内閣は南朝を正統とした。そのため、例えば国史研究会『足利十五代史』（1912 大同館）は「帰順の始めより、既に勤王の志あるにあらず、唯一時の権宜の策に出でしのみ」とし、加藤咄堂『英雄と修養』（1914 中央書院）は「本朝逆臣を算す、先づ指を足利尊氏に屈せざるはなし」と厳しい評価が続き、昭和の戦争時にも尊氏の評判は芳しくなかった。商工大臣を務めた中島久吉が在任前の1921年に俳句同人雑誌『倦鳥』に記していた尊氏を評価する文章が1934年、雑誌『現代』に再掲されて国会で問題視され、野党からの激しい追求を避けられずに大臣職を辞任す

ることになる事件も起き、菩提寺である等持院も「朝敵の寺」として肩身の狭い時期があつたという。好評価が再びあらわれるのは戦後のことである。

それにしても生首ならぬ木像の首が晒される状況はかなり異様であつたであろう。倒幕への風の強さを示す事例であり、諧謔の効いた快事ととらえる向きもあつたようだが、人物に対する評価が時代の変化に容易に追従してしまふ好例であろう。像に対してでなければ叶わない「將軍」という極めて高位の人物を公衆の面前で侮蔑する行為のインパクトは計り知れぬものがあるが、そのような行為が遂行されてしまふ状況自体に幕府の弱体化を見て取れよう（※注）。

2 人体的異人図

同様の例が同じ幕末の京都、しかも梟首事件と同じ文久3年に起きている。長州藩はこの年の5月10日を攘夷決行の期日と定め、下関海峡でアメリカ商船ペンブローク号（Pembroke）に砲撃し、同船を打ち払った。その後も外国船の砲撃を続け、これら一連の攻撃は下関事件と呼ばれて

いる。1年後の5月10日に長州藩主毛利敬親（なつか）は下関攘夷戦争1周年を記念して臣下と祝宴を開き、藩地にあった少壮の尊攘志士達は、絵師でありながら勤皇画家として国事に奔走した森寛齋に異人図2面の制作を依頼する。何のためかといえは、驚いたことにこれを見立てて銃撃することが目的であった。つまり、敵の像を撃つことによつて攘夷記念の祝意を表したのである。「人体的異人図」という題名のついたこの図は現存するが、恐らくはきちんと見たこともない抽象的イメージの産物として描かれた像は、敵に似ていると言ひ難い容貌である。しかし彼らにとつて「異人」らしければそんなことはどうでも良かったのであろう。画面を見れば多数の弾痕が残る異様な図であるが、それぞれの弾痕の横に誰が撃つたのか名前が記されるあたり、盛り上つた余興の様子が伺える。

その後忘却されていたこの異人像も、後の世において再注目されるあたりが足利尊氏と共通する。太平洋戦争の真つ只中の1943年秋、京都帝国大学尊攘堂でなんと80年ぶりに展示されることとなつている。京都大学のHPによると、尊攘堂の名は、子爵品川弥二郎が吉田松陰の遺志をくんで1887（明治20）年に京都高倉通錦小路に創設

し、維新における尊攘の功ある人々を記念したものに由来するといふ。現在の建物は、品川の死後京都帝国大学に寄贈された松陰の遺墨類をおさめるため1903（明治36）年に建てられ、その後京都大学の埋蔵文化財研究センターの、さらに文化財総合研究センターの資料室として使用されている。この尊攘堂という国立大学らしからぬ名の建物において、1943年が80年ぶりの展示ということであるから、図を銃撃した祝宴以来公開されていなかったということなのであろう。当時の『京都新聞』（1943年10月26日）は「見事、撃ち抜いた胸板 米英蘭めこの通り！ 八十年ぶりに公開される尊攘秘帳 撃滅一途 人体的異人図」と写真入りの記事を載せる。下関事件でも米英蘭の船を砲撃していたことになぞらえて、「人体的異人図」で痛めつけた目下の敵の米英蘭を撃滅せよと、勇ましい記事に仕立てている。

妖怪や幽霊のように確実に眼にしたことのない幻想の図においてフィクション化に必要な想像力が多く働くのは誰にも理解しやすいことであるが、異人というのは現実存在している人物である。しかし、長州藩邸における異人は、藩士にとつて本当は近くで見たことはない、得体の知

れぬ人々のことであり、知らぬが故に勝手に想像力を膨らませ、敵意を剥き出しにできる対象であつたはずである。オリエンタリズムの視線と同様、敵から見られたり、攻撃されることを想定する必要もなく、ある意味(真の意味)においては「不在の敵」を相手にすることは、他愛もない行為に見えながらも、一方的な敵意を増幅することを可能とし、かえって敵愾心を共有することを容易にしたのではなからうか。少なくとも強い敵を現実にも目の前にすれば、攻撃をする人もある一方で、逃げる人も、そして敵に取り入る人も出てくるものである。

3 憎き敵性国民

アジア・太平洋戦争期には敵愾心の醸成を目的に像が頻繁に用いられる。そのターゲットの三傑といえば、アメリカのルーズベルト、イギリスのチャーチル、そして国民党の蒋介石であつた。

1943年1月にはルーズベルトとチャーチルの似顔絵が貼り付けられた「米英の突撃目標人形」というものが現れる。体の下部には「屠れ(はふれ)」「撃滅!」の貼り紙が付けられ、その前を竹刀や棒を手にした青年がエイ

ツと突撃目標人形を狙うのである。同様に、埼玉県秩父では町角にチャーチルの藁人形が置かれ、「米英撃滅 老も若きも共に一突」という看板を掲げて道行く人に突かせていたという(清水武甲『秩父戦中の記録』1977年 木耳社)。長野県でも「米鬼・英鬼」と描かれたルーズベルトとチャーチルの吊り看板が設置されていた(川上今朝太郎『銃後の街 ―戦時下の長野・1937〜1945』1986年 大月書店)。肖像と言えば御真影が有名であるが、畏過ぎる天皇像は冒瀆される危険もあつてなかなか公衆の面前には現れない。そうなると、米英との開戦以降終戦まで、最も人気を集めた肖像は、ルーズベルト、そしてチャーチルであつたということになるのかもしれない。

1943年4月に開催された東京・日本橋の隣組運動会では各種競技の中にバケツ・リレーという時局を髣髴とさせる競争が行われたが、標的となつたのはここでもルーズベルト大統領の肖像であつた。同年6月の愛知県消防大会の肖像の的めがけて放水が行われている。今から考えるとかなり滑稽でもあるが、肉親をはじめ親しい人たちがみな兵隊となつて必死に戦っている敵国の首領を倒すイメージ

で競技を行えば、リアリティが増したのであるか。

他のいろいろな道具を介しても敵性国家への攻撃は止まない。「撃ちてしままむ 米英（重慶）撃滅競技」という子ども用の玩具でもルーズベルト、チャーチル、蒋介石の顔が撃滅の対象として用いられている。また、標的が顔ではなかったのであるが、1942年（昭和17年）3月の後楽園球場における巨人―大洋戦の試合前アトラクションは軍服姿の選手による、「米英撃滅」と書かれた的をめがけた「模擬手りゅう弾投げ」であった。

また、撃滅というわけではないが、人形が敵性として処分されることもあった。カリフォルニアなどへの日系人移民が増加し続ける1920年代のアメリカでは新移民法も可決され、排日運動が高まっていたが、米日関係の悪化を懸念したアメリカ人宣教師のシドニー・ギューリック博士が日本の雛祭りの風習にかこつけて、アメリカ人形を雛壇に参加させる呼びかけを行い、12、739体（数字には諸説あり）の「青い目の人形」が1927年に日本に届けられた。各地で人形の歓迎会が行われ、大切にされたのであるが、これらの人形も太平洋戦争がはじまると、「敵性人形」とみなされ、多くが焼却処分されている（近年、焼

却を免れた人形が幼稚園などで再発見され、各地で話題となっている）。

4 現代でも攻撃される像

ウクライナ東部のハリコフでは2014年9月28日夜に市内に立つウラジミール・レーニンの巨大像が、ウクライナ政府支持派の人々によって引き倒された。1960年代に建造されたというこの像は高さ8・5メートルで、ウクライナ国内最大といい、旧ソ連の支配の象徴であり、親ロシア派と親欧米派との対立においてロシアの影響力の表象とみなされて論争の種となっていたという。実は同年2月にこの像の撤去反対住民が像の周囲にバリケードを築いて阻止する行動に出ていることも報道されていた。親ロシア派が多数のウクライナ東部にありながらウクライナ政府寄りのハリコフ当局は、レーニン像の撤去を約束していたが、結局住民たちが手を下したことになる。現代においても銅像や肖像が敵愾心を向ける象徴の地位を手放していないことがよくわかる例である。

さて、この事件に関係のある話であるが、つい最近の2

015年10月のこと、AFP通信、時事通信など各メディアは、ウクライナ南部のオデッサで、工場敷地内に建てられていたレーニン像が、2か月後に最新作の公開を控えた人気SF映画「スター・ウォーズ」シリーズに登場するダース・ベイダーに姿を変えたことを伝えている。各報道によると、ロシア革命の指導者レーニンは、前述のように現在のウクライナ政府支持派の多くからは嫌悪される存在となっており、4月に可決された、共産主義時代の過去を想起させるような全ての象徴や記章などの排除を命じる法律の対象となっていたという。オデッサでも撤去が迫る中、なれ親しんだ地元住民らが反対し、「撤去するくらいなら、変装させてほしい」という声が高まっていた。撤去から免れさせるため、地元芸術家のアレクサンダー・ミロフがダース・ベイダー像を手掛けた。彼曰く、中味はレーニン像なので必要とあらば元に戻せるという。各メディアは「レーニンを救った」と好意的に伝えた。ダース・ベイダーは「映画では悪役として描かれているが、ウクライナでは人気存在であり、ウクライナの統一地方選挙でも、「ダース・ベイダー」を名乗る候補者がオデッサ市長に再び立候補しているほどという。

撤去されるべきものが救われたことがニュースになるというのは、スター・ウォーズの話題性もあるが、それだけ共産主義時代の象徴がハリコフのように各地で撤去されていることの証左にもなろう。旧ソビエト連邦から独立し、現在でも親ロシア派と親欧米派に分かれて複雑な政治情勢下におかれるウクライナの中の、オデッサという国際色豊かな港湾都市において、アメリカ文化を象徴する像が共産主義を象徴する像を護る姿は、奇妙で滑稽でもありながらも、単純に敵味方を区分するだけでは解消できない現代的で重層的な社会状況を示唆しているといえよう。そうはいっても、このようなユーモアに溢れた芸術家や住民の対応は、徒に対立を助長する状況が多発する国際情勢下において、大変興味深いものであり、今後の動向も気になるところである。事の是非をうんぬんする以上に、価値観の対立を視点を変えてずらし、とぼけた対応を示すことも場合によっては大人の態度といっているのではないかと、嘆かわしい衝突が起こるたびに思うのである。

5 おわりに

敵の像を打つ、撃つという冒流行為は、単純に敵愾心を

醸成する方法で敵対意識を助長し、戦時では戦意高揚、さらには国家体制への意識強化を図ったものである。もちろん像に傷を負わせることで具体的に敵に何かが起こるはずはない。しかし実際の敵とは違い、絶対に攻撃されることもなく、見る側の一方的な敵意を受け容れてくれる敵の像は、集団が共有意識を育むために非常に都合の良い敵愾心養成メディアであるといえるだろう（もちろん中には敵性人形のように、敵愾心醸成というよりは焼かれてしまつて哀れでしかないものもある）。

現在でも各地で、肖像は落書きされて破られ、銅像が引き倒されることが多々ある。それだけ崇敬（裏を返せば嫌悪）するものが多様であり、価値観が一様ではないことを裏付ける。近年に引き倒されたり、その候補となった銅像をみてみると、レーニン、スターリンやサダム・フセインに加えて、蒋介石、孫文、マッカーサーとその人物像を考えてみても一様でなく、気に入らない人物像を引き倒してフラストレーションを解消しようという根源的欲求は共通するにしても、それに至る経緯は複雑化していることがわかる。敵同士で撃ちあうよりは、像を撃つほうが穏当ともいえるであろうし、これで最低限の平和が保てるというの

であれば、敵の像はそれこそ恋人の写真を破るのと同様に、有効かつ安全な調整弁として機能しているということもできるかもしれないが。

像は人物の人格を代表、もしくは人物の身代わりとして機能し、特に銅像などの場合は、崇敬すべき人物などを記念、記録して後世にまで遺徳を残すことを目的とするはずであるが、ここまでこのように次々と為される像への打撃について記してみると、畢竟「像」というのはフラストレーション解消の道具としての機能、本人を攻撃する代替としての機能が、権力者の権威が長続きしづらい近代から現代においては、突出して拡大してきているようにも筆者には思われるのである。もちろんその背景には、像を通して権威を早急にモニタメントとして定着させ、その永続化をめざそうと安易に試みる心性が近代社会の特徴になっていることもあるのではないだろうか。

さて、皆さんはどう思われるだろうか。

※注 坪内逍遙は1909年に刊行した『作と評論』の中で面白い見解を示している。「近頃流行るアイコンクラズム即

ち先祖伝来の偶像を叩き壊すといふことは誰も仲間入がして見たいやうな痛快な仕事だ。維新の際に足利將軍の木像を斬首したたぐひだね。それがために生ずる弊害も少くないが、盲崇拜の弊に比べたら、差引利益の方が多くもあらう。少くとも進歩発展に資すると云へる」。明治末に偶像破壊が流行っていたという情報については今後実態の確認が必要であるが、誰もがしてみたい「痛快な仕事」という見方はさすがに新しい芸術を創造しようという精神には相応しいものであったらう。